社説 1976年を迎えて 3面
闘う仲間の年賀状 4面
アンゴラの歴史（1） 8面

新左翼

1976年 1月5日 第240号
昭和43年12月12日第三種郵便物認可
1部60円
5、15、25日発行
半年間 1000円
一年間 2000円
振替口座 大阪 88555
発行所 新左翼社
本社 大阪市北区池田町21番
安田B 06（358）4376
06（351）9436

戦列を固めよう 前進を

新左翼社取扱書籍

交流 一四三号
一九七六年一月号
兵庫県労働運動交流会発刊
B5版 六ページ 三〇〇円 〒料五五円

宿怨 黒工場
大阪地域合同労組植田満俺分会
植田マンガン労災・公害調査団
共編発行
B5版 一七二ページ 六〇〇円 〒料一二五円

ころび草
脳性麻痺者のある共同生活の生成と崩壊
横田弘著
A5版 二五〇ページ 一三〇〇円 〒料一四五円

教育と権力
処分撤回闘争5年の歩み
山下不当処分撤回を進める会発行
A5版 一六二ページ 七〇〇円 〒料一二五円

怒りの炎を燃やせ！
—西成分会の闘い—
全港湾建設支部西成分会発行
B5版 六四ページ 二〇〇円 〒料五五円

志田重男遺稿集 第一集
若草社発行
A5版 三〇〇ページ 三〇〇〇円 〒料二五〇円

隔離の壁をたおせ
「障害児」教育の今日的課題
久保井規夫著
B6版 一二六ページ 四〇〇円 〒料七〇円

10—9デッチ上げ弾圧・雇用合理化・一時帰休粉砕の・総力戦体制強化のために
全金光洋精工徳島支部発行
B4版 三八ページ 三百円 〒料五五円

申込みは新左翼社へ

労災闘争の前進を！

第4回関西交流集会開く

【大阪】十二月二十一日、東淀川区の日之出解放会館・東淀川勤労会館で第四回、労災職業病と闘う関西交流集会が行われた。集会では折りからの雨をついて参加した約三百人の労働者・学生が、朝十時から夕方五時まで、「労災源除去」をめざす労働運動の発展をめざして活発な論議をかわした。

関西労働者安全センターをはじめ北摂労災職業病対策会議、南大阪労職対、京滋労職対（準）、尼崎労働者安全衛生対策会議の主催による今年の関西交流集会は、この一年の安全センターを中心とする関西での広汎な労災闘争の成果の上に開かれた。そのため、昨年までの極めて一般的な分科会の分け方を改め、現在、具体的に労災闘争が直面している課題を分科会のテーマに据える方法が取られた。

第一分科会「被災労働者の闘い」第二分科会「検診・安全パトロール・安全委員会活動と労災闘争」第三分科会「官公労の認定・補償闘争」第四分科会「災害源除去の闘いと首切合理化」第六分科会「未組織労働者の労災闘争、組合がとり上げない労災闘争」

このように設定された各分科会では、南大阪の全港湾、全造船、北陸の各地から参加した労働者が自分の職場の闘いを報告し交流を深めていた。

午後三時半からは全体集会が開かれた。議長団には京滋労職対の小城氏、全港湾沿岸南の登氏、尼崎労働者安全衛生対策会議の藤井氏が選ばれ、三池労組、全港湾沿岸南支部からの特別報告、分科会報告が行われ、最後に関西労働者安全センターから基調報告が提起された。

この基調報告の中で安全センターの豊田氏は、広がる労災闘争に対する支配階級の闘争封じ込め策としての労働安全衛生法、産業医大綱線を鋭く批判した。そしていまだに一部労働運動に残る、技術主義、専門家への「おまかせ闘争」の誤りを指摘した上で、労働運動の一部としての労災闘争の位置づけが、この厳しい状況の中で益々強く要求されていると報告を結んだ。

集会全体を通じて、労働者自らが集会をつくり上げるという姿勢が随所に見られ、労災闘争の質的深化、広汎な広がりを感じさせていた。益々反動化する行政、容しゃなく合理化攻撃を強める資本に対して、組合の組織化、地域共闘の形成なしには、労災職業病根絶の闘いはあり得ないという基本的方向が大衆的に確認されたことが、今年の集会の一つの大きな成果であろう。

写真は第四回関西交流集会

西多摩支部単独で突入

12・10ストに都教組幹部を告発

主任制度反対の12・10日教組全国統一ストは共産党の恥すべきスト破りをけって各地でストを確立したが、都教組は戦線から脱落した。都教組傘下のなかで唯一西多摩支部はスト権確立を背景に単独でストに突入した。次は一組合員からの報告である。

「はずかしい話だが涙が流れてしかたなかった。」

「胸のつかえがすーっとおりた。」

「西教組に入っていてよかった。」

「はじめてのストがこんなにすばらしくて幸せ。」

ストライキこそ、労働者の学校である。12・10日教組半日ストライキに、都教組の31支部の中で、西多摩支部は単独で突入した。

12・10日、一時行動開始八〇三名。全国の闘いの中で、苦闘の中から結集した組合員の顔は、ストライキで立ち上がった誇りと自信に満ちており、まれにみる感動的な集会であった。前日の深夜、スト突入と決定、当日の朝その報に接して参加を決意する組合員や、日共のおとかしにあって脱落するとれ、胸のつかえがすーとおりていきました。あといくばくかの教職を残す年令である私は若い諸君に行った。しかし、分会に残った部分もあったが、スト確認署名をこえる参加者と、三時行動開始の組合員も迎え入れ、デモ開始時には八〇〇名を越える集会として成功したのである。

分校統廃合で闘っているPTA会長、地区労の仲間、日野自工有志の会、学生と連帯と激励をうけ各地区協からの闘いの報告が、ユーモアと余裕をこめて報告される中で、二時間にわたる集会が、終始参加者の感動をもり上げていった。

最後に、委員長が立ち、スト突入を決意した時からの心境を語る中で「今までの日教組、都教組の運動になかった歴史的な闘いであり、この闘いは、その第一歩であります。この集会の中で、迷いも

私の発言

主任制度との闘い

大阪S市教組　H生

一　九年前の一九四一年十月二二日、日教組は「ベトナム反戦・人勧完全実施」をかかげて、全国統一ストを行った。その時、当S市においては、権力側は、そのストに参加した者（ほぼ全員の組合員）の中から、特に各学年の学年主任を摘出し、行政処分（戒告）を加えてきた。

二　この種の闘いの歴史をたどれば――勤評闘争に際し、その不提出を確約していたS市校長会の違約行為を追及し、七五日間にわたってその登校を拒否し、遂に、二十数名の全校長を、その背信・背徳の故に、「追放処分」（降格・退職・市外転勤）にしてきた歴史。

この種の闘いの歴史が特徴的なものとして挙げられる。

三　何等かの形で既存・現存している制度・慣習・体制を、固定化し、強化し、支配秩序化するのが、支配階級の「法制化」である現状において、そして、名目上、実質上、「各種主任」の存在が一般的である現状において、（日教組の委員長すら、校務主任などの必要性を認めている）当S市教組の経験は、稀有の意味を持っていると思うし、これ等の経験を土台に、今後の、府段・市段階・学校段階における闘いが徹底的に闘われるものと思っている。

四　もう一つの話題として――当S市教組党員教師を、意識的にどんどん転勤させてきたため、先年、党員数が一〇〇名の大台を越えたことが、確認されているからして、一〇〇名の党員以外ではやっぱり、五〇票国家権力の別動隊としての役割りを、いよいよあらわにしてきたのも、今回の半日ストにまつわる忘れ得ぬことの一つであった。

この悪質な恫喝に対する反撃闘争の延長上に、私達S市教組は、それまで職場に存在していた主任制度に、大きい疑惑を持ち、この「主任制度の全面的解体」を課題として取り組み、その実現に成功してきた。

この悪質な恫喝に対する反撃闘争の延長上に、私達S市教組は、それまで職場に存在していた主任制度に、大きい疑惑を持ち、この「主任制度の全面的解体」を課題として取り組み、その実現に成功してきた。

その後、府教委が、職管理職の特別身分職に対して、一〇〇%その特別性を抹殺し、完全に形骸化させ、実質的な定員増として定着させてきた歴史、などにおいて、そして、名目上、実は、まさに猛烈であった。

批准投票の結果を分析してみると、当S市教組では反対票が約二五〇票であったが、そのうち一〇〇票は、もともとスト反対の言わば基礎票であり、日共が、賛成の〇票を投じたことも面白い。

一〇〇名の党員で集めた票が五〇票というのも珍現象であるし、また、若干の職場で、明らかに党員と目されているのが、賛成の〇票を投じたことも面白い。

五　結局、大教組全体としては、五十二%という低率ではあったが、三度目の正直で（昨秋闘、今春闘の二回は失敗）批准に成功したわけである。

日共が牛耳っている単組・支部では、軒並み一〇%台、せいぜい二〇%台という、ひどいものであった。

東京・京都などのメトロポリスの教組指導部を牛耳る日共がストつぶしに成功し、文部省＝国家権力の別動隊としての役割りを、いよいよあらわにしてきたのも、今回の半日ストにまつわる忘れ得ぬことの一つであった。

× × ×

二組内部に目覚め

上組闘争の前進つづく

【大阪】全港湾関西地本が一昨年から昨年と総力をあげて取組んだ上組闘争は、近畿海運局長がだした労働者の基本的権利を認め、不当労働行為については謝罪する、という趣旨のあっせん案を四月二十四日に上組が受入れ、全港湾の勝利に終った。この闘争は地域産別をこえ全国化し春闘共闘委も支援を決議、参議院社会労働委員会で労働省が追及された。それだけでなく、全港湾はカナダ、アメリカ、ソ連、中国、オーストラリア、インドネシアなどの各国の港湾労組へ上組が扱う荷役のボイコットを要請したところ、オーストラリアの港シドニーでボイコットが決行された事が伝えられ、国際連帯の生きた教訓を知ることができた。

しかしこれで上組闘争は解決したわけではない。職場では陰湿な攻撃がつづいており、地労委で全港湾建設支部（三井東圧・日曹）が闘争中であり、労働協約を交渉が終っていたにもかかわらず文書確認の段階でくつがえしてきている。港湾運送業者では山九とともに全国でトップの地位にある上組を相手に勝利した闘争は、昨年の労働運動のなかで全国的にみても大きな位置を占めている。

全港湾の組合員Kさんは「闘争の影響がいま一番顕著に現れているのは、御用組合の上組労連のなかに『今までの労資ベッタリを改め一線を画さなければならない』との意見がでてきたことだ」と、次のように語った。

正面きってスト破りをしなくなった上組労連の機関紙に「上組の労資関係は二〇年おくれている。経営と労働条件維持改善とは区別すべきだ」という内容の意見がでていた。

これは上組の労働者のなかに大きな変化がでているということだ。

上組には社員・職員・雇員・作業員という四ランクに区分された身分制があり、社員は神様、雇員作業員は虫ケラ同然、牛馬のように働かせ、奴隷のようにあしらい働けなくなるとボロキレのように捨て去る。その間搾取した分は奴隷をうまく働かせた社長・重役・中間幹部と順番に山分けしてきた。ところが今年度の一時金は全員三・二カ月となった（今までは社員三・五、職員雇員三・〇、作業員二・五）ことに示されるように、社員が作業員の上にあぐらをかいて仕事することができなくなった。しかし資本はあくまで身分制に固執しようとしており、今後これをめぐって大きな闘争になり資本のなかに動揺も起るだろう。

新日本文学　1月号　¥300

■集団ドキュメント■
――現代労働目録抄――
橋本雄介、芳川幸造、藤森司郎
村松孝明、山田昭彦、荒川義清
錦米次郎、清水克二、柴　清三
小谷章、村山富士子、篠原貞治
皆木育夫、桜田武雄、樽成小沢信男

●小説
「袖の別れ」川平方吉

●詩
小野十三郎・阿部岩夫他

「企業収容所列島」にっぽん　近藤完一

中野区東中野1－41－5 新日本文学会（362）8771

火焔ビン

▼世界の歴史を区分したともいえる激動の一九七五年もあと数日。このすばらしい年まで生きながらえた喜びをかみしめながら、この年を知ることもなく去った無数の戦士たちをしのぶ。

ベトナム人民の勝利！
世界恐慌の到来！

地球上のあらゆる地点で人民の闘いは燃上り、燃広がりつづける。▼「繁栄ワクチン」をくらわされ過ぎ、テレビとマンガに脳をおかされ、思考を失い、人の心を失い、老いも若きも子供まで浮かれ踊った、浅はかな安逸な一億人のあほう踊りに幕がきた。手に豆を作った事もない連中が労働者の解放や革命を唱え、思想を持たず、歴史も理論も学ばず、ヘルメットの色別けに身をやつし、生命をかけるその不毛にも幕がきた。帝国主義大学卒業生で守り固めた奇妙な共産党が、針金細工のようにマルクス主義をねじ曲げ、ぶくぶくふとった笑い話にも幕がきた。月賦の家に月賦の車、猫もシャクシも大学大学、ペットの犬猫とわが子の区別もつけられぬ馬鹿親どものはびこる時代も終り。止まれ！あほう踊りはもうすんだのだ。▼アフリカで、パレスチナで、迷彩服に身を固め銃を手に闘う少年兵たちの勝利の時代が足音高く近づいてくる▼おしよせる荒波と暴風の前に、踊らされ疲れた人びとはいまたじろいでいる。驚ろきうろたえ身を固くし荒波にもまれている。そしてその体験のなかから素速く、じつに素速く、新しい時代に対応する体制へ身も心も脱化させている、この数カ月間の人民の変化を見逃がす者、木がみえて森の見えない者、表をみて裏の見えない者、現象をみて本質を理解できぬ者、今をみて過去も未来も見ようとしない者は日ならずして闘いの戦線から逃亡し、放逐される。この嵐のなかでマルクスレーニン主義は日本でも再生する。あらゆる組織と個人がこのなかで試され鍛えられる。去る者をして去らしめよ、逃げる者をして逃げさせよ。このなかで闘いの戦列は強化される。新しい年よ来たれ！（老）

瀬戸内海を取戻せ

大阪集会 漁・住民、労組80団体が参加

汚染により死滅に瀕した瀬戸内海にとどめを刺した三菱石油の重油流出事故から一年、この間、海を救いだすために沿岸漁民、住民、労働者は必死の努力をかけむけてきた。闘いの前進のため経験を交流し連帯を強めようと、十四、十五の両日大阪市浪速区の部落解放センターに漁民・住民団体、労働組合など八十団体三百五十人あまりが集り「瀬戸内海をとりもどそう、生きるために——大阪集会」を開いた。集会実行委員会提案の「瀬戸内海をとり返す住民側の戦略」をめぐって、埋立て、漁業権、環境事前評価（アセスメント）、瀬戸内環境保全臨時措置法の期限切れにともなう問題など討論がおこなわれ、「きれいな瀬戸内海を取返し、安心してうまい魚が食べられるようになるまで私達は闘いつづける」との宣言と「海殺し三菱を許さないぞ！」「全ての埋立てを阻止する」の二つの決議を採択し集会を終えた。

まず、農薬の空中撒布を止めさせる茨木・高槻市民の会、鳴門・香川各赤潮訴訟、瀬戸内漁民会議、豊前火力阻止環境権訴訟をすすめる会、伊方原発反対闘争支援連絡会議の代表から闘争報告があり、集会実行委員会を代表して山田国広氏から「瀬戸内海をとりもどす住民側の戦略」について説明提案がおこなわれた。

十五日は畠野芳郎（瀬戸内汚染調査団）、横井安友（瀬戸内漁民会議）、松下龍一（豊前火力阻止環境権訴訟をすすめる会）の各氏の講演、集会宣言、二つの特別決議を採択、スローガンを確認して終った。

提案の基調——瀬戸内海の破壊に対して住民はよく闘ってきたが、くいとめられないのは権力の攻撃に対して防御的であったから、攻撃型の運動を展開していくための理論武装を討論したい。赤潮、ヘドロ、コンビナート、埋立、火力、原発、大型開発（本四架橋、新空港、ビラ湖淀川開発、パイプライン）に対する住民側の戦略、瀬戸内海環境破壊臨時措置法（臨措法）と環境アセスメントに対する対策などについて説明がおこなわれた。

討論を要約すると——

〈埋立〉瀬戸内漁民会議「漁業権は物権のように売買の対象とされるものではなく、操業取益権・漁場管理権として理解されなければならない。その立場から汚染に対して補償を要求するのは当然だ。漁民は闘っているがどうしようもない無力感から補償金要求へ流れていってしまったが、あまりにも早く漁業権を放棄してしまったのではないか、もっと粘って闘えばよかったと反省している。」

漁民問題研究会「漁業権を売った漁民は敵だという態度に憤がいしている。放棄しなければならない圧力に眼をむけてほしい。」

〈環境事前評価〉

実行委提案——住民から積極的に事前評価を要求していく。その原則として①資料の事前公開②住民参加③開発中止を含む見直し権限。

豊前火力阻止環境権訴訟をすすめる会「権力の事前評価は、水質や生物の分布を調べただけで、調査といえるようなものではなく、権力側の儀式にすぎない。」関西新空港反対泉州住民連絡会議「もともと環境破壊をもたらすだけの新空港建設にとって事前評価自身不必要だ。それに住民参加を求めるというのはおかしい。」ビラ湖淀川汚染の反対運動、道路建設反対運動などから事前評価を要求して闘っていく路線の有効性や、要求して調査をさせることによって反撃した例などが報告。伊方原発反対闘争支援連絡会議「通産省は海はどんなに汚してもかまわない、すべて金で解決するという方針だ。そこからできたのが事前評価で、手法はコストベネフィットといい、資本の論理が評価の基準だ。公害をなくし日本をどのようにしていくのか政策を持たずに事前評価だけを取出して論じても論議倒れになる。」

結論——事前評価に対しての対応は運動によって異なり、それで運動の手をしばるのはいけない。

〈臨措法〉

提案——臨措法は汚染防止に全く役立っていない。来年期限切れになるが、住民から立法化運動をすすめる。

福山公害をなくする市民の会から臨措法に対する住民側立法案が提起されたが、かえって運動を停滞させるのではないかと危惧がでて、提案については海を取戻すための綱領案として受け取め、更に内部で論議を重ねていく。

闘いにまにあう印刷
〈ビラ・雑誌・パンフ他〉
特急OK・代金は相談
☎358-4376
新左翼社印刷部

攻撃型の闘いで 住民側の戦略テーマに

今年二月の三菱石油糾弾をかかげた東京集会、岡山県水島現地での集会、徳島鳴門での集会につづく四回目の大阪集会は、八月に準備活動が始まり、今までにない慎重な準備で行なわれた。

各団体の活動報告は予稿集として二百十六ページの部厚いパンフレットになり事前に各団体に手渡され、報告抜きで最初から提案と討論に入った。瀬戸内海汚染に反対して闘っている住民運動団体のほとんどを網羅することのできた大阪集会では効率的な討論や宿舎での夜を徹しての交流など今までにない密度の濃い集会を組織することができたと言えよう。

集会の成果としては次の点を指摘することができる。

一、瀬戸内海汚染のすさまじい現状、これを強行していく政府資本の住民切崩しのやり口を分析そのえげつなさを具体的事実を通して全体的に知ることができた。

一、失敗や消耗を重ねながらも、なおかつ闘いをつづけていくことが環境破壊に対する歯止めになっており、闘いを継続し強めていくことだけが海を取戻す道であることを全体で確認することができた。

一、漁民、住民、労働者、学生、研究者などが立場の違いと利害をこえて海を生きかえらせるまで連帯して闘いつづけることを確認した。

一、守勢の運動から攻撃型の運動への転換がせまられている時、この集会はその第一歩とすることができた。

一、住民側の戦略を、個別でなく全体的に打出そうとした試みは始めてであり、この集会が単なる交流会に終らず、次の闘いのステップとなった。

一、瀬戸内汚染に取組んでいる各運動体の情報交流と意見交換のため、実行委がだしてきた「瀬戸内通信」を今後もつづけていくことになった。

集会でできなかった事として①漁民の参加が依然として少ない②住民とコンビナート労働者との連帯、本四架橋によって大量に解雇される港湾労働者と住民との連帯などの内容が討論されなかった③臨措法の期限切れに対して住民運動としてどう対応するのか④事前評価批判を大衆的な批判としていかに運動化していくのかなどの課題が残されたことなどであろう。

瀬戸内汚染調査団では三月に漁村へキャラバン隊をだし、ビラまき聞込み調査をしながら漁民への働きかけを強めていく計画を立てている。

社説

大胆に大衆の中へ 前進の一九七六年を迎えて

（一）

戦後かってない不況をむかえて三年目、景気上向きの観測しきりである。ブルジョア経済学者は「もう底入れだ」「次の四半期には確実に回復」など何度予告したことか。事実はそのたびに予測を裏切ってきた。なぜなら彼らは今回の不況を規定している現代資本主義の極めて深刻な困難をみることができず、当りさわりのない現象的な矛盾をなぜまわしているからである。

その困難は第一に、すでに技術革新が沼湯し、大量生産大量消費を刺激する新製品がなくなったことである。第二に、寡占体制が資本主義世界全体にわたって網の目のようにくまなく張りめぐらされた結果——これは第一の困難を生みだした原因でもあるが——生産過剰になっても商品の価格は下るどころか逆に上る始末で、そのためコストの高くつく旧い生産設備の廃棄が進まず、過剰設備がいつまでたってもなくならないことである。第三に、生産規模の最限ない拡大に資源の有限性、環境汚染の拡大からブレーキがかかっていることである。第四に、各国とも恐慌回避のため金本位制から離脱し、管理通貨制度を採用したが、商品の需要をこえた通貨の増発がインフレーションを引きおこし、物価の騰貴は大衆から購買力を吸取り、市場をますます相対的に縮少し、景気の回復を遅らせている。

このため資本主義経済はたとえ景気が回復したとしても、流通過程にとどまり極めて軽い短期的なものにすぎず、不況は長期にわたって深刻にならざるをえないのである。これらの困難をみようとしないブルジョア経済学者の予測が当る保障は何一つとしてない。

今まで世界を政治的経済的に支配してきた帝国主義に対抗して、反帝勢力はインドシナ三国革命の勝利が示すように急速に力をつけてきている。その中心が第三世界であることはいうまでもない。これら諸国は帝国主義諸国に対して世界的な規模で富の再配分を要求し、じりじりと追詰めている。

米帝は崩壊する世界支配体制を立直し、第三世界の攻勢を食止めソ連の進出を阻むため、東南アジア、中東、アフリカ、欧州でデタント政策をとり、相手陣営の分断と現状固定化を狙い、一部では破綻しながら一部で成功を収めている。インド、アンゴラでみられるように、社会主義から変質したソ連は、反帝勢力の一員をよそおいながら米帝と第三世界との対立を利用して勢力圏を拡張しようとしている。

このような世界情勢のなかで中国の外交路線が益々重要さを増しつつある。しかし我々が中国外交から学ぶべきは政府がとる外交路線を外交レベルのみで傍観者的に論じることの決定的な不十分さであろう。キッシンジャーによる米帝の世界戦略の基本的敗北はここにある。たとえば中国の対米接近政策がアジアの一部の国で隣級的矛盾を激化させる結果を招いている事が示すように、自国の革命運動に即して主体的にとらえることが要求されている。各国内の革命運動のみが唯一、歴史の前進の原動力であるのだ。

（二）

インドシナ革命の勝利で最も深い影響下にある東南アジアでは、米帝はこの地域にある多国籍企業の権益を守るため、各国の自立化を追認していかざるをえない。非力な日帝はECのように第三世界と独自に取引きするよりも米帝の傘の下で取引きする道を選んでいる。先進資本主義国のなかで第二位の経済規模を持ちながら、低い不利な地位に甘んじなければならないわが国の支配隣級は、それ故、韓国を除いて第三世界や他の帝国主義国に負担を転嫁することがより困難になり、自国の労働者隣級と農民を始め人民大衆にそれを負わせて、危機を切り抜けようとしている。

日本経済の国際競争力が相対的に低下していくなかで、支配隣級は'76春闘を昨年に引続き低額に抑え込むため必死になっている。そこで、大量解雇の必要を力説している日経連は、政府に現行の雇用保険を上回る失業給付制度の新設を要求している。独占資本家隣級は'76春闘を前にして、労働力を更に一層安く買叩くため失業者を巷にあふれさせようとしている。

不況だから会社も苦しい。たしかにそうだ。しかし社共がいうように、国有化が解決にならないことはイギリス・イタリアの例が示している。これらの国では国有化は資本の不始末を税金で尻拭いする手段にすぎない。現代の社会で衣食住を保証できるのは社会の富を一手に集中している支配隣級ではないか。権力を握っている彼らは労働者隣級を始め被抑圧人民大衆に衣食住を保証する責任を負っている。もうからないからと資本の投下をサボり、あるいは国外に資本を逃避させる資本家隣級に遠慮せず闘いつづけるヨーロッパの労働者隣級の闘いに学んで我々は敵を明らかにし、彼らの責任をあくまで徹底的に追及しようではないか。労働者階級が一旦権力を握るならばわが国の社会を人民大衆に衣食住を保障する社会に作りかえることのできる力量を持っていることを我々はすでに「日本社会主義改造計画案」で一明らかにしてきたが、今後も系統的に追及していくであろう。

（三）

人員整理を強行している各企業では、資本家は単に職場にある旧い職制機構や旧い人脈を維持するというのではなく、青年労働者を新たにつかみ直し、再編成していくというダイナミックな方策をとっている。むしろ労組が旧い人間関係や旧い職制機構に対する未練を捨てきれず、闘争が解体させられていく情況がおこっている。資本の厳しい合理化攻撃のなかで今までの旧い人間関係によらず、旧い職制とのつき合いや慣行などの幻想を捨て、自ら新たな闘いの構築がそこでは要求されている。

このような資本の思い切った攻勢のなかで、共産党は労働者大衆が闘いに立上ることを信ずますます敗北的になっている。しかし現在の労働者隣級は、資本の攻勢に敗北し陣地を明け渡していった60年代の高度成長期の労働者隣級ではない。

全世界的におきている大きな地すべりのような変動は、職場に直接資本の攻勢として表われているが、それだけではなく、八日間に及んだ公労協ストにみられるように、労働者の感情や思想にも大きな影響を及ぼしている。共産党がどのように策動をくりかえそうとも労働者隣級が必ず立上ることを確信し、大胆に大衆の中へ入っていこうではないか。

現在社共などで既成の幹部によって各所で労働組合そのものが解体され、労働者は要求を持っていく場がなくなっている。そのような所では単に共産党が悪いといっただけでは闘争は一歩も前進しない。自ら職場で大衆闘争を組織し運動を作りだしている所では前進が始まっている。

いかに既成の幹部が裏切り、資本の苛酷な攻撃で厳しい情勢になろうとも、前進の芽が労働者大衆の中に必ず存在することを確信し、その芽をのばし連帯の輪を広げ前進を勝ちとるよう訴える。

（四）

現在の情況は自分だけが厳しい情況におかれているのではなく、自分の職場の仲間全部が、あるいは隣りの職場が、周りの工場が企業が、それぞれ現れ方と程度の差はあっても同様の情況におかれていることが特徴となっている。

「新左翼」はそのような なかで問題意識を持ち、現状を変えるために何かをしようとしている労働者の要求に応えることのできる新聞を目指してきたし、今後もその方針を追及していこうとしている。そのなかでわれわれは紙面を通して各地の経験のなかから読者に広汎な闘いの直面する問題を提出し、運動に対して受動的にではなく能動的にかかわっていく新聞へと前進させていく決意である。

▽……△

—〈投稿歓迎〉—
▽字数・五百字前後▽住所・氏名明記・紙上ではとく名▽送り先・大阪市北区池田町12 安田ビル二階新左翼社「たたかいの中から」係へ

闘う仲間からの年賀状
粘強く闘い前進へ！

厳しい情勢のなかで敵の攻撃にとまどい失敗をくりかえしながらも、各地で闘いはつづけられ前進を勝取っている。七六年をむかえて各地で闘いを担っている人びとから、報告と新年にあたっての抱負などが編集部に送られてきた。（到着次第順次掲載）

好期きたる！

大阪　全金細川鉄工支部　津島茂夫

世界資本主義体制の同時不況危機は、ベトナム、カンボジア人民の解放戦争勝利、中東に於ける国際石油資本に対抗した石油政策、更には、第三世界諸国の反米帝、反日帝の植民地政策に対する抵抗が、米帝を始めとした資本主義諸国の「政治的、経済的、軍事的」危機をより深化させている。日本独占資本、反動支配者は、クリーン三木「対話と協調」のギマン政権を打ち立て、世界支配から転落する米帝に対して、天皇訪米による米帝の感情回復や「日韓米」軍事同盟の強化アジア再侵略を画策し、国内に於ける反動化、賃金ガイドライン首切り、一時帰休の攻撃はいやが上にも階級対立を激化せざるを得なくなっている。高度成長のぬるま湯につかった合理化と、賃上げのバーター制の右翼労働戦線、あるいは、ブルジョア議会主義に埋没する反階級日本共産党等別者集団・宮本一派の、解放同盟に対する敵対や、「教師聖職論、公務員奉仕者論、ストライキ迷惑論」を乗り越え、公労協の「スト権奪還闘争」は、下部労働者の突き上げによって、八日間のストライキを貫徹した。まさしく「いねむった」日本労働運動に質的転換を呼び起すゼネストを展望する闘いを切り開いた。現在南大阪にかけられている、鉄鋼独占・金融独占の地域拠点に対する攻撃や、一年有余にわたる親会社、独占資本に対して不屈の闘いを展開している、多くの争議支部は、地域の階級的連帯にささえられ、泊り込み態勢による工場占拠を貫徹し、一歩一歩確実に独占資本を追い込んでいる。

一九七六年以降の闘いは、まさしく労働者階級にとって、絶好の時期到来と云える。天下大動乱の時、新左翼社の労働階級への「勇気と確信」を与える適確な煽動活動に大いなる期待を寄せると同時に、全国の革命的労働者階級の解放に日夜献闘する仲間に年頭の連帯の挨拶と致します。「労働者階級の更なる発展万歳」

強制連行の次は公労協スト弾圧
―名古屋被済芸病院が―

東京　韓看会

特に全国の看護労働者の皆さんに韓看会より年頭のアッピールをいたします。

全国の看護現場からの情報では、昨夏までに導入された韓国人労働者は序々に帰国の途についております。

東京女子医大では八月にひっそりと、聖ロカ国際病院でも「ヨゴザンス・コンビ」（ヨウさん・ゴさん）と親しまれている二人を除いて全員が帰国しました。

今年、三月にはさらに多数がきびしい労働から解放されて離日いたします。

ここで反省ですが、それでは彼女達は私達日本人とどのような友情を持ち、日本の労働運動の姿を見聞し、民主的力量をつけて帰国されたのでしょうか。

資本家ども反面教師として学ぶばかりでなく、私達をも反面教師にしたのでは。

医労協は全然とりあげませんでしたし、資本家はますます増長しています。

例えば、公労協ストに対して「参加組合員はみない」といった愛知の済生会病院（太田元次理事）もまた、導入策動の元凶でした。朝鮮人に対する攻撃の次には日本人労働者への弾圧がまっている好例ではないでしょうか。

韓国政府は最近、イランに大量の看護婦を売りに出しています。

韓国からの現代版強制連行
―看護婦導入策動を許さぬ会

行政公害との闘い

市議　上福岡　亀井れい子　玉埼

ひたすらわが子の成績のみを気にして、ほかのことはまるで眼中にないPTAのおばさんたちをせん動、やれ幼稚園をつくれの、学校施設を充実しろのと、ただただ票稼ぎのオベッカ活動にうき身をやつす日共議員にうんざりしながら、人間らしい生活をとりもどすための運動にあけくれた一年といっていい。

人間らしい生活をとりもどすために自分たちができることはなにか。ひとりひとりが物質万能主義の発想を転換し、公害追放に立ち上ることだと考える市民が、わたしの地域でもかなり増えてきた。わたしは、その市民たちと手を握った。学校給食から合成洗剤やリンを追放し、そしていまサッカリン入り食品の追放に取り組んでいる。

地域ゲリラの闘いは、意識的に目ざめたグループが権力に挑む場合と違い、とかく道草が多くきわめてしんどい。が、わたしはいささかでも主体的に物事を考え、現状変革の行動を起そうとする芽が少しでも伸び易いようにと、議員の立場をフルに活用してきた。しかし、そのたびに痛感することは、行政公害という問題である。

主権在民や地方自治はまさに絵空ごとで、行政担当者の顔はみんな中央に向いてしまっている。住民の生命や生活より、文部省の顔色であり、厚生省の意向が気になるのである。

地方自治は、住民と行政機関との共同作業であり、自治体が真に自治体として機能してはじめて、作民の権利が守れるのだということを、県や市の職員に向って説くのに、なんと多くのエネルギーを費やしてきたことか。

この、行政公害との闘いは、地域に根を張って運動するものにとって、まぬがれない闘いなのだということを腹にすえ、ことしも地域市民との連帯を強めたいと思っている。

地域共闘へ踏出す

全電通大阪中電分会　古布充

私達公労協労働者は、スト権奪還をかかげ十一月二十六日から八日間ストを貫徹した。

このスト権ストは「二～三日ストをうち、その圧力で政府とホス交をすればスト権は獲得できる」と甘い幻想で闘争に突入した民同幹部の、情勢への認識の甘さを見事に暴露するものであった。

だからこのような誤った情勢分析と戦略から出発したストライキであったが故に「体制の危機」を全面にうちだした政府自民党の政治攻撃の前には、ひとたまりもなかった。

しかし闘う職場労働者は、七五春闘時で敗けた時のような「敗北感」はなく、従来の路線での闘いではゆるし位の戦術強化で期間を延長したところで『全面奪還はできるものでない』ことを身をもって体験した。

労働者がこの闘いを通じて階級対立にさらされたっている状況を知り、また自分達の現在の運動が基本戦略において敗北せざるを得ない誤りであることを確認できたことは、大きな前進であり、今後の闘いに重大な意義をもつものと思う。

この中でもっとも失笑をかったのは、日共の「国会集中審議」の方針であった。日共がその方針をだした影響もあり、スト終了後の国会審議の中継放送をみていた労働者は、全員が異口同音に「国会はつまらん。日共の誤りがはっきりした」と冷たいまなざしでテレビを見つめていた。

中電分会では二八～二九日の48時ストを闘い抜いた。そしてこの闘いの中で地域闘争の重要性を認識し、門前ピケットでの決起集会に民間労組を含めた多くの地域周辺の労組が参加され、連帯集会ができたことが七六春闘への地域共闘への萌芽をみることができた。

勝利の手懸り把む

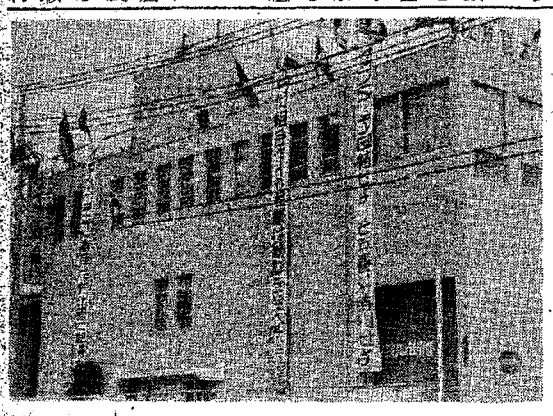
大阪　全金ダイヤ化成支部

総評全金ダイヤ化成支部は、昭和四十九年十二月以来、偽装閉鎖―全員解雇攻撃粉砕に向けて本社ビル占拠を軸に約四百日を戦闘的に闘いぬいている。当初全く展望が見出せなかった我々も、ようやく昭和五十年六月に半年間逃げ回っていたダイヤ化成加茂社長を実力で団交の席へ着け親会社ベークライト商事（住友資本）並び東食（三井独占）ともども、交渉の場へ引きづり出すことに成功。

しかし、ダイヤ化成の偽装閉鎖を強行したベークライト商事とそれに加担した東食は、道義的責任を認め団交に応じながらも、その後、見舞金名目の手切金による解決案を提示したのみで、いたずらに交渉を延ばし、兵糧攻めから組織の弱体化を画策してきた。

同年十一月より年末にかけて、支部は全金・全電通の仲間と共に連日、ベークライト商事大阪支店と同東京本社への抗議行動を展開。資本側は依然としてかなりの抵抗を示し、我々の要求する「職場再開」を法的責任の不在で逃れようとしていたが、結果組合の激しい怒りに①ベークライト商事は、組合員の生活の非常事態を了解し在庫商品の販売手数料等を緊急救済策として年内に支払う②これと併行して、本争議の基本的な解決策についても検討提案する、ようとしていたが、結果組合の激しい怒りに①ベークライト商事は、組合員の生活の非常事態を了解し在庫商品の販売手数料等を緊急救済策として年内に支払う②これと併行して、本争議の基本的な解決策についても検討提案する、を確約させるに至った。

支部は、すでに「役員派遣要求」を除くところで基本的な同意を得ている東食との「交渉成果」を新年よりの対ベークライト商事との団交の中で反映させ、より具体的な提案を行なうこととなるだろう。ダイヤ化成・ベークライト商事・東食の三資本野合による組織破壊攻撃に対し、広範な実力闘争を背景にした力強い前進と圧倒的な勝利を目指し、組合員とその家族の堅い団結を誓合っている。



写真は組合が占拠中の本社建物

PLO代表部設置を

国際問題評論家　北沢正雄

アメリカはどうしてもパレスチナを圧殺したいと考えている。レバノン内戦はそのために準備されてきた。

日本政府もそのことを期待して、レバノン内戦の行方をあれこれ占いながら、PLO代表部設置のことを急がない。

PLO代表部設置は今年は是非とも実現させたい。

ついこの間、中東問題を研究している人達に会ったら、こんな話が出た。アラビア湾沿岸に進出している日本企業は、オイルダラーを使っての現地建設に南朝鮮労働者を使おうとしている。

産油国の経済建設にマンパーワーが足りない。こう誰もがいう。

インフレで国際競争力が落ちた日本企業が目をつけたのが安い朝鮮マンパーワーである。

産油国の王様たちもこれには食指をうごかす。

王様たちは石油でもうけ、宮殿をつくり、最高級のカーを並べた。パレスチナ解放のことなどあまり考えたくなくなった。

やってきて今まで働いてくれたパレスチナ人労働者を厄介視するようになった。

流れ込んできたインド人、パキスタン人はほとんど回教徒である。中には戒律を厳しく守ろうとする人たちもいる。王様たちにして見るとこれも厄介である。

こうしたことで王様たちも朝鮮人労働者移入に食指を動かすようになった。

被差別者の連帯へ

関西青い芝の会連合会　かまたにまさよ

全国の、差別、不条理、新しい未来のために戦いつづける、兄弟、姉妹、友人のみなさん！

一九七六年の新しい年頭に当って、私達、日本脳性マヒ者協会、関西青い芝の会連合会は、心からのあびいるを、みなさんにおくります。一九七五年は、かってなく、障害者の自立と解放の運動が新しい理念をともないつつ、もり上った年でした。それは、今まで、生きる事の範囲を最少限度にとどめる事によってしか、おのれの生を全うできなかった私達、障害者が、「反福祉」の旗のもとに、自らの運命と、歴史、決定権を自らの力で創出しつつ、障害者の生き方を規定してきた社会のあらゆる事共に対峙する事を切りひらいたのを意味しました。

一九七〇年代も、いよいよ後半に突入し、社会の全ての階層にとって、世界の人びとにとって、歴史的な情況がひらかれようとしています。私達にとっても、若干の様相のちがいはありますが、分かちあわねばならない認識だと思います。私達は、ふみにじられ続けてきた私達の生きようにも、ガンコに固執しながら、私達の未来を共有するべき人びとの連帯が、その情況の中に正しく位置されなければならないし、それを要求しつづける事が、様ざまな戦線で戦いつづける友人たちとの友情であるとかたく信じると同時に、私達に課せられた、自立と解放への任務であると考えます。私達は、すべての差別と戦う人びとに被差別統一戦線実行委員会の提起と、全国の障害者差別と戦う組織をつなげる全国障害者解放運動連絡会議（障解連）の提起を行い、権力、行政の差別行政や、養護学校、施設などの隔離政策を先どりする融和主義運動とたたかい的に対決する運動をになおうとしています。今年七月には、大阪でそのための第一回交流集会が開かれます。しかし、私達は、このような運動を行いつつ、決して忘れてはならない事があります。それは、はなやかな、お正月行事を横にみながら、山奥の施設で一人孤独をかみしめる、私達の兄弟がたくさんいる事実です。

一九七六年、それは、私達の自立と解放の力量が本当にためされる年です。私達の両手には、あたたかい友情とうめたい現実があります。みなさん、新年あけましておめでとうございます。

無人化は許さない

大阪　北合同豊中学校警備員分会

新左翼読者の皆なさん。私達豊中市学校警備員が劣悪な労働条件の中より立ち上り、分会結成以来、早や一年が過ぎ去ろうとしています。

この一年間さまざまな皆なさんの助けを借り、未熟ながらも、広く世間に満足に食事もできないという学校警備員の現状を訴え、又わずかでありますがそれなりに成果も得てまいりました。

しかし、依然として元請責任者である市当局は「無人化も考えている」とおどしをかけて来るというありさまです。

私達は今年、一人一人の職場の分散、大半が老人で動きがとりにくいと言うギャップを乗り越え、絶対に無人化＝解雇は許さない強固な組織、闘争づくりをめざして頑張ります。今年も昨年と変らぬ皆様の支援をお願いします。

地財危機の狙い見抜け

長崎市議　岡正治

日米共同声明と、それに基づく日米の共同侵略作戦協定の締結という形をもって、日本帝国主義の朝鮮侵略は今や決定的な総仕上げ段階に入った。一九三〇年代の日本帝国主義のアジア侵略の嵐の中を生きてきたわたしは、いま歴史の逆流を肌で感じている。完成期に入った一億背番号制で、日本人民を朝鮮侵略にかり立てようとたくらむ帝国主義・自民党政府は、全国の自治体を財政的危機に追いこむことで完全に掌握しようとしている。

わたしは自治体の内部から、真の新しい政治潮流を生み出すために、たたかいつづけることを誓う。

私を含めて、話し合った人たちは、誰がどこであろうと働くことは自由であるべきだという意見だった。しかしアラブの王様たちと一緒になってパレスチナを締め殺そうとするのは、結局本人を締め殺すことだと思う。これは読者の皆様でも同じでしょう。

日本、朝鮮、パレスチナ、パレスチナは遠くではない。人種差別の南アフリカも遠くではない。

大衆運動の力量を

鳥取 米子市政研事務局

差別者集団日本共産党と正面きって闘い議席を獲得してから半年、我々の闘いも七六年を迎えてよりきびしい試練にさらされようとしている。権力の側がかけてくる「地方財政危機」の攻撃は、日本帝国主義の危機に直面して体制内的にしか問題を考えてこなかった既成政党を屈服させ、「左」右合同の対政府陳情運動に労働者階級をまきこもうとしている。

このような時にこそ、「地方自治体は国家権力の支配の手段」であり「大衆的実力闘争しか問題を解決する道はない」という我々の立場が、実践的に試される。米子においても、水道料、国保税等打ち続く公共料金値上げの中で、「応分の値上げは止むなし」として戦線逃亡する社・共を越えて、「値上げの原因は何であり、我々はどういう立場をとるべきか」を、議会後の街頭報告等で訴えてきた。しかし、労働者、市民の大衆運動を組織しうる基盤をまだかち得てない。

結成五周年を迎え、危機の時代に闘い勝つ思想を深めつつ、全国の闘う仲間とも交流しながら、物質力をもった潮流に米子市政研究会を形成していく決意を新たにしている。

五年目迎え勝利へ

東京武蔵野市 教育社労組

教育社闘争は五年目に突入し、いま一つの大きな局面をむかえています。三七項目にわたる解雇事項をめぐっての、東京都労働委員会における不当労働行為救済についての判断＝命令が年内にでそうな情勢のなかで、私たち教育社労組はアルバイト体制を解き、全員専従体制のもとに、連日この十二月から闘争を展開しています。

この闘争のなかで労務担当だった桜田総務部長はやめ、新たに労務部長が入社し職制はこれまでの「かたい口」を開き、団交再開等議解決の努力をするとの約束をし、非組合員、下請労働者たちも、組合員の職待に耳を傾け始めています。銀行なども動き始めている様子です。

他方私たちの闘いの体制も「12・17教育社闘争勝利総決起集会」に五十団体二百名以上の闘う労働者の結集をもって勝取られたことに象徴されるように、地域産別争議団等労働運動への波及を着実に進めてきています。

私たちは都労委命令を最大限活用しつつ、実力就労闘争のより一層の強化拡大をもって解雇撤回＝職場奪還を教育社闘争勝利へむけて、まい進していく決意です。

「新左翼」愛読者の皆さん。イ

要求勝取る力を

大阪豊中市議 小沢福子

新年おめでとうございます。

この不況の嵐は各政党の美辞麗句を吹きとばしています。七五年最後の定例議会で、職員の賃上げが市長から提案、各党の賛疑がありました。このなかで各党派の発言を拾うと——

自民党「一に人件費、二に超過負担、三に革新のええかっこし。」

共産党「職員の賃金を上げるなとはいわないが、赤字再建団体になって多くの市民に迷惑をかけるのは駄目だ。」公明党（ヤジ）「結局上げるなということなのかはっきりしろ。」社会党「自治省の赤字再建団体攻撃に屈するな。」

このマンガともいえるやりとりをききながら、われわれ労働者と地域住民の権利を決して侵さず、労働者大衆の生活をかえ、自からの力を持って食べていけるよう大胆に勝取っていこうではありませんか。労働者大衆の巨歩を支配者の中枢へ打込もうではありませんか。

共に闘かわん。

冷酷な国鉄当局

大原さんを支援する会 大阪

「視力障害者」大原隆さんが大阪環状線福島駅でホームの端がわからず転落し、入ってき電車に両足を切断されてから、今年の八月で三年経つことになる。大原さんは常に言う。「なあんも国鉄は変っていないじゃないか。いつまでたっても『障害者』を締め出している」——この言葉はまさに国鉄の本質を言いあてたものである。

スピードアップに精を出し、騒音をまき散らす新幹線構想にうつつを抜かし、労働者の人権さえも認めない国鉄当局は、「利用者の便」などとうそぶいているが、昨年六月の我々との団交においては「障害者の要求を受け入れれば一般利用客の便を損なう」と公言したのである。「障害者」を利用客と見なさい——これが一斉に「障害者専用室」を作った国鉄の基本姿勢なのだ。大原さんの両足切断は、もはや大原さんと国鉄だけの問題ではない。全ての「障害者」が、「国民の足」を歌い文句にする国鉄を糾弾しなければならない。

そこで大原さんと我々「支援する会」は、徹底的に公開の場に国鉄を引きずり出すべく、裁判闘争を設定している。その過程で、終始、責任回避を続け、大原さん個人の問題にすり替える国鉄の、たった三千円で一個の人間の全ての権利を奪い去った本質を、逐次暴露していく決意である。「障害者」全ての問題として、「障害者」自らの結束を固めたい。

しかし、この裁判闘争を真に支えるものは、「『障害者』差別が資本主義に支えられた能力主義に基づくものであること」を見抜いた労働者との連帯であると考え、単なる民事裁判の法廷内のみの闘いとして捉えるのではなく、裁判を通じての法廷外闘争を打ち立てることにより、「障害者」解放の更なる運動の発展としたい。

——労働者解放の更なる運動の発展としたい。

超えよ地域エゴ

三里塚芝山空港反対同盟 戸村一作

十年の闘いをかえりみて思うことは、地域エゴをどれだけ超えることができたかということである。この一事は闘いを左右する、決定事項だと思う。エゴがいかに闘いを阻害し分裂をきたし、敵に通じる道を与えるものであるかを、反省させられる。いかなる地域闘争も地域エゴからは、権力問題化はしない。その点、三里塚闘争は権力問題として政治闘争化した点で、幾分たりともエゴを超え、階級闘争化したといえると思う。

新年を迎えて鉄塔戦も間近に在るだろう。三里塚闘争が今シリアスに求めるものは、単なる戦略戦術ではなく、同盟がエゴを止揚し、コミューンとしての共同体を闘いの中にいかに構築するかということだ。これなくして闘いは、一歩も進めなくなった。それほど闘いは極限状態にあるということだ。単なる「連合」的なものでなく、労農学同盟による党的確立が、不可欠の拠点となった。これは闘いの中に求められる必然性であって、いかなる市民運動たりとも権力化するならば、当然、闘いの拠点をこれに求めざるをえないだろう。自民党三木政権の転覆なしには、三里塚闘争の勝利はありえないという段階に突入した。鉄塔戦はこのような中に闘われるものであって、決して局所的な決戦の場ではなく、あらゆる分野すべてにおいてはその事が如何に大きな障害となり、打撃を与えているのかという点でとらえて活動する事が大切だと思う。

日本の資本主義は非常に危機的な要素をはらみつつも、この危機をのりきるために賃金抑制・クビ切り合理化等を行って、労働者に先を少しでもかわそうとしている。ここに又、彼等の弱点もある。

強制的に職場を奪われた労働者の胸の内には、不満や怒りがうずまいているであろう。が長い間の日常的且つ巧妙に行われている敵の宣伝や攻撃によって、一人で文句を言って見ても、とか、誰かがんばってくれたらなあ、とかのアキラメになってしまっているだろう。

が誰もやってくれない、不満を仲間との共闘しかないと組合を結成して立上り、保全管理人の提案した不当な全員解雇をはねかえし、更生開始決定後、管財人の行ってきた一方的な指名解雇をも地域の闘う仲間の支援を得て撤回させて、年末一時金に対する差別をもはねかえして、本工と同月数を闘いとった全金寺内臨時嘱託労働者支部の闘いが、この事をはっきりとしめしている。

現在七六春闘の方針討議がどこでも行われている。資本家どもはこの不況下の企業危機では賃上げの出来る条件はない、一ケタ台も出せないゼロもありうると言っている。

我々も今までの延長線上に今年の要求額はいくらだと言っても職場の意識は、物価はどんどん上って生活も苦しくなっているが、仕事もだんだんなくなっているのにとの気持がどの人の顔にもある事は見逃せない。

今までの如く要求を決めてスケジュール闘争を行っている方式ではダメだ、と言われながら事は同じ様に進んでいる。もっと足元を見つめよう、今までの闘争ではダメだ七五春闘は敗北だと言われているが、本当に労働者一人一人が全力を出して職場で地域で闘ったのか。他の組合がストで闘っている時に自らもストを打ったか、そこへ支援にかけつけて共に闘ったが、鉄鋼・自動車に代表される民間の大組合では労資少数のボス間の茶のみ話的な話合いで、職場とは全く無縁の所でわけの判らん内に低額で終っている。それでいて春闘だと呼ばれているのだからたまったものでない。我々もまだまだやりきってない事が多くある。

本当の力を出しきってない。上からの統一スト設定だけでなく、職場・地域からも体制を作って大きなストをやり切らねばならない。

整然とした闘いという言葉がよく使われる昨今だ、があまり整然としすぎて敵にすべてを読まれている様な闘いでは我々の要求は貫徹しえないだろう。大衆的な怒りを結集して敵の側にこれから先がどうなるか判らない、という不安と恐怖心をもたせる様な闘いにならねば、要求を認めさせる事が出来ない事は明らかだ。

先日、この事を話していたらある活動家が「それはそのとおりだが敵の側が恐れる前に味方のえらいさんがびっくりしてしまうだ」と言った。そうだろう。本工組合の各機関には資本の手で飼いならされた職制がたくさん入ってきている場合が多いのが実態だ。

末端管理機構である職制に対する闘いを職場から大衆的に作り出さねばならない。

現在、大衆的な不満と怒りは数多く各地に存在する世の中だ。

今年も頑張りたいと思っている。（中見出しは編集部）

（筆者は全金宗滋地本オルグ）

おことわり

十二月二十五日号は休刊にしました。十二月十五日号に掲載すべきところ遅れたことをお詫びします。

新左翼社

論壇

職場地域にストト体制

76春闘めざし首切り攻撃打破を

☆首切りか賃下げかを迫る資本

☆会社更生法下での闘い

小城修一

高度経済成長の中で資本の側は、一定の名目的賃上げとひきかえに、労働者から大きなものを奪いとって行った。

それは今さら言うまでもなく、徹底した合理化の導入であり、パート・臨時・嘱託等の差別分断雇用の導入であり、下請化で無権利の労働者を低賃金で使い捨て、労災・職業病により労働者の生命と肉体を大量に奪ったあげく、政治的・社会的な諸課題に対する闘いを排除する意識をうえつけ、会社あっての従業員という企業意識を充分にうえつけて、搾取と収奪をほしいままにしてきた。

彼等は、この企業意識を充分にうえつけてあるとの自信の上にたって、これをフルに活用して七五春闘にのぞんできた。

すなわち、会社がつぶれては元も子もなくなる。だから賃上げを自粛せよとのおどしである。そして資本・権力一体となって15%ガイドラインなるものを作り上げて、それ以下に押えこむべく一斉攻撃をかけてきた。これはすでに本工に対しても行われている。

この攻撃に対して多くの労働組合（本工組合）が如何に対応してきたかについては今さらのべるまでもない。が、資本家どもは余剰人員をかかえていると言って事あらばいつでもクビ切りを行おうとしている。彼等は七五春闘で功を奏した自信の上にたって、雇用かくだまそうとしている。

資本家どもは余剰人員だと言ってもっとクビ切りをやりたいが、極端に行って社会的な不安を作り出しては困ると思っているだろう。

労働運動・闘争の視点からとらえるならば、その様な事に甘んじ、今までの長き（彼等にとっては）労資慣行をこわしてしまっては、これからの施策に支障をきたすと思っているに違いない。

その職場を闘う労働者が確保しているという事によって闘争の拠点が各所に存在し、敵の側にとっ

生活保証しか考えていなければ企業を守るという事におちいって、資本家にとっては都合のよい事になってしまう。

資本家どもは余剰人員だと言ってもっとクビ切りをやりたいが、極端に行って社会的な不安を作り出しては困ると思っているだろう。

労働運動・闘争の視点からとらえるならば、その様な事に甘んじ、今までの長き（彼等にとっては）労資慣行をこわしてしまっては、これからの施策に支障をきたすと思っているに違いない。

その職場を闘う労働者が確保しているという事によって闘争の拠点が各所に存在し、敵の側にとっ

会社がつぶれたら元も子もないからという資本家どもにとっては、最も都合のよい口実のもとに、奴等に身体を縛つけられ、痛めつけられた労災・職業病の仲間も含めて、今まで最も抑圧されてきた人達がクビを切られ犠牲になった自信の上にたって、雇用かくだまそうとしている。

資本家どもは余剰人員だと言ってもっとクビ切りをやりたいが、極端に行って社会的な不安を作り出しては困ると思っているだろう。

労働運動・闘争の視点からとらえるならば、その様な事に甘んじ、今までの長き（彼等にとっては）労資慣行をこわしてしまっては、これからの施策に支障をきたすと思っているに違いない。

その職場を闘う労働者が確保しているという事によって闘争の拠点が各所に存在し、敵の側にとっ

持っている人、怒っている人々が職場や地域で立上って怒りを前面に出して、ひどい目にあわせている奴等に団結でぶち当らねば自らの生活も権利も、生命すらも守られない事がはっきりとしてきた。

会社更生法申請下でます俺達に対して攻撃がかけられてくるに違いない、自分の生活と権利は自らが立上って団結して闘う事、闘っている人々の要求額はいくらだと言っても職場の意識は、物価はどんどん上って生活も苦しくなっているが、仕事もだんだんなくなっているのにとの気持がどの人の顔にもある事は見逃せない。

今までの如く要求を決めてスケジュール闘争を行っている方式ではダメだ、と言われながら事は同じ様に進んでいる。もっと足元を見つめよう、今までの闘争ではダメだ七五春闘は敗北だと言われている。彼等は七五春闘で功を奏した自信の上にたって、雇用かくだまそうとしている。

資本家どもは余剰人員だと言ってもっとクビ切りをやりたいが、極端に行って社会的な不安を作り出しては困ると思っているだろう。

労働運動・闘争の視点からとらえるならば、その様な事に甘んじ、今までの長き（彼等にとっては）労資慣行をこわしてしまっては、これからの施策に支障をきたすと思っているに違いない。

その職場を闘う労働者が確保しているという事によって闘争の拠点が各所に存在し、敵の側にとっ

就職相談室

失業中の活動家の皆さんの為に、新左翼社内に就職相談室をつくりました。気軽にご相談下さい。

☎06(358)4376
(351)9436

パレスチナ革命思想胸に

中野マリ子さん五年ぶり帰国

パレスチナ解放組織PLOの月赤十字病院で、五年間ポランタリア（無償労働）の看護婦として働いてきた中野マリ子さんは、十二月十二日夜帰国した。警察は不当にも東京の羽田空港で彼女を拘束し、持物をひっくりかえし、パスポート・カセットテープを取上げた。しかし厳重な抗議の末彼女は翌日釈放され記者会見をおこなった。十五日大阪の本社を訪れた彼女は、パレスチナで体験したことやそのなかで感じた事、帰国にあたっての抱負など語り懇談した。次は中野さんが帰国にあたって新左翼社にあてた報告である。なお帰国後、中野さんは、パレスチナでの経験を生かし国内での運動に積極的にとりくむという。彼女の健闘を讃えるとともに、彼女によせられた支援に深く感謝する。

私は、十二月十二日の夜十一時半に羽田空港に着いた。そして、心をはずませて荷物を持って税関に向かった。そのとき、四人の政治警察に呼び止められた。その中の一人が、胸から警察手帳を取り出して「中野マリ子さんですか」と言って、さらに「君の荷物はこちらで調べることになっている」と言った。これに対し、私は「なんで調べるのか？証明書を見せてくれ」と言った。このことを私は何度も要求した。すると、彼は再び胸の中から『日高敏彦に関するコピー』を出してきた。日高なる人はまったく私の知らない人物である。私は頑強に拒否したけれど、行手をはばまれ、空港内の奥の長く暗い通路を通って、小さな部屋に連れこまれた。

中野マリ子さん

そこで、私のパスポートと力セットテープ（アラブの歌）を押収された。そして、空港から出たのは夜中の二時頃だった。

連絡が十分にとれなかったため、空港には誰も迎えに来ていなかった。

これが五年ぶりの祖国であった。

おそらく、私のパレスチナでの行動は日本のためにでもあったのに。

私たちの祖国は、支配者階級が占領しているのであって、決して私たち労働者階級のものではなかったのだと思い知らされた。

私は持っている。パレスチナという豊かさと愛の祖国を持っている。

空港を出て、東京の街に出ると、一台の車に四人の政治警察の尾行隊が乗り込み、ピタッとくっついて来た。そして、その後私の行動はこの監視の範囲で許された。

それから三日程して、大分の母に電話した。気丈夫な母は、泣きもせず、頼もしい声で私を迎えてくれた。その時、私は「なぜ、警察の人と仲良くやっているのか」と聞くと、母は「警察の人は、私たち家族に親切にやってくれるんですよ」との返事が返って来た。私はその返事に驚いて、「いったい、この五年間に何があったのだ」と聞くと、母は「妹がある日誘拐され、それを警察の方に頼んでお世話になったのですよ。でも、犯人はつかまえてくれなかったよ（妹は小さな頃に高熱によって精神障害を起こし、無邪気そのままです）」と言った。そしてまた、母は次のようにも言った。

「また、ある時、兄が病気になり、病院のことで警察の方がよくしてくれた。そして、本当に警察の方は、お前が考えるような人ではないですよ。お前の就職も用意しているよ。」

私は母に「それは違うよ。私は帰って来たとき、空港でつかまったのよ。その上、尾行までついているのよ。警察の本質はそんなに甘いものではない。ずっと前には、私が赤軍だと誤解された件で、あなた方家族は連日警察に脅迫とどうかつでおびやかされていたではないですか」と言うと、母は「えっ！本当につかまったのですか」とびっくりして問い返した。そして逆に母から「しっかり頑張りなさいよ」と言われた。さすがに苦労したプロレタリアの母だと感心した。

この混乱した消費社会の中で、あたかも物質的な豊かさでたぶらかされている市民社会の裏で、真剣に社会を変えようとする人々に対しては、政治権力は恐るべき陰謀とファシズムでおびやかしできていることを、声を大にして言いたい。

我がパレスチナも、イスラエル・シオニストと一部の反動アラブ諸国からの惨殺と迫害の中で苦闘している。

現在、レバノン内戦はシオニストとアメ帝のもくろんだ陰謀であるが、レバノン左派を中心に、パレスチナ革命はそれでも勝利に転化して進んでいる。

現在、ベイルートは無政府状態にあり、軍の右派が右派ファシストに加担しているが、武器は人民の手の中で燃えていることを確認した。

左派解放区では、野菜や果物や衣類などがふんだんに積まれ、かけ声をあげて売られているのを見ると、まるで祭りのように楽しく、活気にあふれていた。

あらゆる差別から人間を解放すると言うかぐも崇高なパレスチナ革命思想は、私の胸の中で不滅である。

一九七五年　十二月二十三日

緊急の訴え

韓国への各種「経済協力」民間借款などの情報専門誌『週刊日韓経済情報』の一九七五年十二月十二日付の記事によると、日本化学蔚山工場は近日中に「公害防止設備の補正工事」を終え、韓国政府の最終許可もとりつけて、来春から本格操業＝クロム公害タレ流しを開始できるという。

七十五年夏のクロム禍キャンペーンは日本を席捲しただけでなく、韓国民衆に知れわたった。このため、日本化学経営陣は九月操業開始の準備（韓国人技術者の研修、韓国人労働者の確保など）を終えたものの、断念せざるをえなかった。九月十二日、朴政権は日韓閣僚会議を目前に控え、日本の「公害産業」の「歓迎」の意を表わすべく、日本化学蔚山工場の稼動OKのサインを出した。しかし、『東亜日報』がシリーズ「汚れなき明日のために」を連載しているなど、韓国民衆の監視と日本のクロム禍キャンペーンも続いていたため、日本化学蔚山工場は稼動できなかった。十月一日付『東亜日報』は「年内稼動困難」と報じていたが、いよいよ七十六年早々に蔚山でクロム公害タレ流しを開始しようとしている！

日本でのクロム禍、五十名以上の労働者殺しの責任もとらぬまま、韓国民衆にクロムによる労災・職業病、公害を押しつけようとする日本化学を韓国から撤退させよう！爆薬原料、あらゆる兵器のメッキ剤となる重クロム酸ソーダ製造は日米韓反革命体制の総仕上げだ。

◇抗議電報、電話を集中しよう！

（「富山化学の公害輸出を止めさせる」実行委員会）

直ちに抗議行動を

日本化学蔚山工場76年早々操業開始

あて先　東京都江東区亀戸九―一五―一　日本化学本社　電話（〇三）六八五―一一一一

東京都千代田区一番町二二　棚橋幹一自宅　電話（〇三）二六一―一一五四一

◇緊急行動日程◇

一月十一日（日）第四十九回日本化学本社抗議デモ　総武線亀戸駅北下車、亀戸駅前公園一時集合、三時デモ出発

一月二十五日（日）第五十回日本化学本社抗議デモ同右

二月八日（日）第五十一回日本化学抗議・都心デモ　東西線茅場町下車、坂本町公園一時集合　三時デモ出発

（「富山化学の公害輸出を止めさせる」実行委員会）

「闘いのなかで成長」

各支局が新年の決意

＜豊中支局＞

読者の皆なさんの暖い支援によって、豊中支局も開局三年目に入ることが出来ました。

昨年は、特に近畿在住の読者の皆なさんの並々ならぬ協力と闘いの仲間の力で、統一地方選挙での小沢福子二期目を勝利でかざることが出来ました。

天下大乱の時代の中で十分な支局活動を果したとは言えない昨年でしたが、財政活動ひとつ取り上げても現実に進行する不況のすさまじさの中で、人民大衆の苦悩あるいは雄々しくそれに闘い挑んでいく姿にも学ぶべきことは数多くありました。しかし、今年は単に学ぶことだけで良しとできないでしょう。不死鳥のように踏まれ、けられしながら、たくましい戦士に闘う仲間と共に成長したいと思っております。

その為に読者の皆なさんとの接触も新聞を通じてだけでなく、一層深めたいと思っております。今年も頑張りましょう。

＜神戸支局＞

数多くの読者をはじめとする皆さんの御協力で、神戸支局も開設して既に一年近くになりました。

支局を開設した七五年は、あらゆる分野で闘う側にとって厳しい年でした。

このとき、神戸支局では、闘わない組合のもとで苦闘している大企業労働者とともに、定期ビラまきなどの活動を繰り広げたり、教育労働者の組合再建にむけた組合費凍結運動を拡げること。自治体の若い活動家との交流など、やっとその活動の第一歩を踏み出したところです。

整理してみると「ここは、こうすれば…」と、活動の不充分点があまりにも目につきますが、より一層敵の攻勢が予想されるこの年、この不充分な点を一歩一歩克服していこうと思います。

せまいところにとらわれず、多くの闘う人々と接触を深め、共に運動を創り、力をつけていこうと決意も新たにがんばるつもりです。皆さん、共に奮闘しましょう。

＜堺支局＞

明けましておめでとうございます。

堺支局が事務所を開設してから今年で二年目に入ります。顧みますと昨年は、地方自治体選挙、ベトナム・春闘の討論集会、東南アジア労働運動報告会、読者会などに取り組んできました。また毎週木曜日には継続して哲学の学習会を行っております。

いま泉州地区の労働者、農漁民、学生、市民の闘いの発展を考えてみますと、大衆政治新聞としての力量はあまりにも微力ですが、私たちは読者のみなさまの闘いに学びつつ、敵階級の凶暴な攻撃の事実を明らかにし、読者のみなさまのお役に立てるよう今年も一層の努力を進めて行く覚悟でおります。

今年の目標としまして先づ、支局員の常駐態勢を実現したいと考えております。かねがね支局員が不在がちで、泉州地域の読者のみなさまには何かとご迷惑をおかけしていることをおわびします。次に、泉州の特集記事を企画して行くなかで、読者のみなさまの新聞作りへの参加をお願いしたいと考えております。

以上、読者のみなさまの闘いのお役に立てる新聞にできることを念願にしてがんばってまいりますので、よろしくご鞭撻ください。

＜東京三多摩支局＞

昨年一年読者拡大と取材体制確立のため不充分ながら活動してきました。それは一定の成果をもたらしました。しかしこの不況下動乱の時代にわれわれの支局活動は極めて立ちおくれています。今年こそは、とりわけ取材体制を強化し、読者の徹底的な拡大を重点におき、支局の量的質的発展をめざして活動していく決意です。現在支局内部にはさまざまな問題が山積しておりますが、それは新たな発展の原動力として前向きに解決していきたいと思います。そして又本局との結びつきをこれまでより一層強化し、本局と一体となって全国政治新聞「新左翼」の前進へまい進していく決意です。

心に残るアラブ

（（3））

生きぬく民衆の力

旧市街に見つけたアラブ

オールドカイロ

カイロにもオールドカイロがある。いわゆる旧市街であり、舗装のない道が入り組みうす茶化た建物が並んでいる。都市化の中でとり残された地域として、エジプトの知識人ですらその存在を認めたがらない所である。でも、そこには、たくましいアラブの心が、あのエネルギッシュなアラブの力が在る。

オールドカイロの裏通りで葬儀の行列に出くわした。カラベイラと呼ばれる足元まのスボスボの服を着た何人かの男達が、花をかざった棺桶を馬車にのせてゆっくりと歩いていた。日焼けした浅黒い顔、ほんとにほねばれする黒々としたヒゲ、薄よごれた服と色彩あざやかな棺の花が奇妙なコントラストで、そこに生活する人民のたくましさを感じさせる。その横をクラクションを鳴して自動車が通りすぎて行く。物売りの声は絶え間なく響き、葬儀の列はゆっくりと進んで行った。

イスラム社会

それほど急激な人口の増加は当然にも都市周辺のスラム化を促進した。それだけの労働力を吸収し得る産業が現在のエジプトにあるはずはない。事実、街には一見して明かに失業者とわかると人達があふれ返っている。しかし、それでも、カイロで大量の餓死者が出たということを聞いたことはない。ハダシで歩いている人は多い。がしかし、皆などういうわけか「食え」ているようだ。

考えてみれば、カイロでは我々にはちょっと想像もつかないようなことがりっぱに仕事になっている。例えば、外国人、いやエジプト人の為にでも、タクシーを止めてやるのはわりとかせぎのいい職業である。驚いたことには、体重を計るヘルスメーターを道端に置き、一回いくらで体重を計って金を取るという職業が成り立っていた。どこ限られた農村からの生産物以外には品物を移動することによる貿易、商取引きからの収入以外、富を獲得し得なかったアラブにとって、それは必然の結果でもあろう。そして、帝国主義の植民地支配は、アラブの農村の自給自足経済をも破壊させ、農業のモノカルチャー化をおしつけ、農村の労働力を都市へとはじきとばした。その労働力を吸収し得る近代産業はいまだ存在していないとしても、巨大な都市の消費経済は、膨れ上る人口をかかえ、あえぎながらも彼等が「食う」ことを可能にしてきたのだ。

カイロの裏街を行く子供達

モカッタ山

カイロ大学の女子学生に案内されて、カイロ市郊外のモカッタ山の彼女の家を訪問した。街で食料を買いこんだ彼女と僕は満員のバスに乗り込んだ。雑多な老若男女の視線を浴びながらバスはオールドカイロをぬけて山を登る。もちろん山といっても木は一本もなく褐色の岩がそそり立っているだけだ。少しして、車内の雰囲気がおかしくなってきた。彼女が真剣な顔で乗客の一人と話しをし始め、周囲も皆な聞き耳を立てているようである。どうやら僕の事が話題にのぼっているらしい。そのうち、彼女はバスの運転手に話しかけ始めた。

バスは山を大きくゆれながら登りつつあった。下にはカイロの街が広がり、くすんだ空とナイル川の流れが一望に見わたせるほどになっていた。

（つづく）

たたかいのなかから

ゼネスト万才！

大阪　熊谷　健

去る十一月二十六日から十二月三日に打切られるまで、八日間にわって行われたいわゆるスト権ストといわれる公労協のストライキ、組合幹部自身政治ストといいながらあのざまは一体、ありや何ぢゃ。

自民党政府、反動、ブルショア・マスコミ総働員の攻撃に対して、国民（？）に迷惑をかけますが……何卒御理解下さい云々の弁明、弁解ばかりに終始して、その全力をあげてすべての労働者、すべての働く人民（国民ではない）に、三木自民党政府、独占資本のインフレ、物価値上げ、首切り、賃下げに反対する一大政治闘争に立上り、共に闘おうと呼びかける積極的な、戦闘的な宣伝、せん動はとうとう最後までやらなかった。この点では社会党、共産党とも仲よく歩調をそろえて、イカンなくその正体をバクロした。市長選をやっていた大阪市は特にひどいものだった。女郎の操とはかくの如しといったところ。

とは云うものの、君、ありや民同ストライキの限界だよといわれれば、うむ無念、くそったれめといいたくなる。

三木自民党政府と民同幹部のスト権？（条件付）運賃法定制の撤廃等をめぐる取引の場となった予定の民同管理スト、それが自民党内部の派閥争いのため予定通り行かず八日間のネイライキと相なった次第。

二十数年前の炭労民同幹部が指導したあの八十余日に及ぶ長期炭坑ストライキが思い出される。当時おかげで炭破独占資本は貯炭を一掃し、合理化のための基礎づくりをした結果になったネストライキが思い出されて、益々腹が立つ。

だが思い直してみると、ネストライキであろうと何であろうと日本資本主義の大動脈、国鉄が八日間ピタリと止った事は、いや国鉄の労働者が全国の鉄道を八日間ピタリと止めた事は事実である。これは何といわれようとも、まさに日本の労働史上における歴史的な快挙である。国鉄労働者のゼネスト万才だ。

おれはかって自分が経験した変な私怨？をも晴らした思いで感無量、涙が出る思いである。事態は手放して喜んでいる場合では、無論ないが。

とそうのはおれは四十数年前、日本軍国主義が東北（満洲）侵略を初めたころ、国鉄京都駅構内へビラをまきに行き、事もあろうにその国鉄労働者に追いかけられ、ねじ伏せられ、がんじがらめに縛り上げられていながらも。

その国鉄労働者が日本全国の鉄道を八日間、ピタリと止めたのだ。これが驚ぱくには居られようか。

労働者は人民の支持を得て（から）闘うのではなく、いやまさに労働者は徹底的に闘い抜く事によってのみ人民の信頼を得る事が出来るし（ブルジョア支配者と闘う最も強力な戦友として）又そうしなければならないとレーニンおやじは言ったという。おれは公労協、国鉄の兄弟がこの歴史的闘争の経験をさらなる自信、確信に変え、近き将来、必ずや日本労働者階級の最も戦闘的な先進部隊としての、その輝かしい革命的責務を見事に果すであろうことを信じて疑わない。

だがソ連の露骨な干渉は、その本性を自己暴露するものとなるにちがいない。

ソ連の植民地にされることが真の独立だろうか。そもそもソ連や一部マスコミのいう「左派」「右派」のレッテルはデタラメなものである。今や各国で「左派」の仮面をかぶる親ソ派は最悪の反革命的・反民族的役割を果しつつある。アメリカの手先に反対するのみでなく、ソ連の手先に反対してこそ革命派といえる。ソ連の宣伝にまどわされることなく、アンゴラに対する一切の外国の干渉に反対し、内戦の停止・解放組織の団結をよびかけることこそ、アンゴラ人民の真の反帝・民族独立を支持する革命派のなすべきことである。

アンゴラの内戦

東拘　渡辺正則

十一月十一日アンゴラ人民は独立をかちとったにもかかわらず、二つの「政府」が樹立され、内戦が一層激化するという悲しむべき情況にある。

アフリカ統一機構は従来からアンゴラの三つの解放組織をいずれも承認し、連合をよびかけ、外部勢力の干渉を強く非難してきた。これは正しい立場である。三つの組織はまちがいなくポルトガル植民地主義に対して武装闘争を闘ってきたのであり、この点でどれかが二七物ということはできない。また矛盾は発展の原動力であって、意見の相違があること自体は悪いことではないし、独立達成のため団結できないような食い違いではないだろう。

内戦を挑発したのはソ連社会帝国主義であった。彼らは宣伝機関を動員して、ある派は革命的だ、ある派は反動的だとレッテルをはり、対立を煽りたて、三派の合意をブチこわした。彼らはポルトガルに対する解放戦争の間は軍火器を供与しないできたのに、アンゴラ人民同士の殺し合いが始まると、ミサイル、装甲車、戦闘機などの近代兵器を特定の一派に供与し、ソ連船からロケット弾を発射して直接アンゴラ人民を殺害することまでやっている。さらにソ連と親ソ派の某国は直接軍隊を派遣していると伝えられる。彼らはアフリカ統一機構の警告を無視し、逆に一部の加盟国に威かくを加え、一派による「政府」を承認した。アメリカ帝国主義も負けてはいない。内戦に乗じて南アフリカ人種主義の軍隊をアンゴラ南部に進攻させ、白人雇い兵、右派ポルトガル軍人を送りこみ、殺し合いに拍車をかけている。

アンゴラ内戦は革命と反革命の戦争とはなっていない。超大国のワナにはまり、もっとも危険な敵を味方ととりちがえ、超大国の干渉を容易にし、アンゴラ人民に災危をもたらし、独立を空文句とせしめている。アメリカと同様、ソ連の目的も民族独立支援などにはなく、アフリカ随一といわれる豊かな鉱物資源や農産物にめぐまれ、戦略的に重要な位置をしめるアンゴラを支配下におくことにある。社会主義の仮面をかぶるソ連は、人をだますという点において、その好戦的な姿勢からいっても、より危険な存在である。

冬の共和国

Y・S（韓国光州市中央女高教師）

ね、きみ
おれたちの田畑が眼を見開いて
激しく息するのが見えなかったか
ね、きみ　おれたちの田畑が打ち沈み
誰かの名を呼ぶのが
呼びながらぐっと拳を握りしめ
ギリギリと歯ぎしりしては
空しくカラカラと笑いたて
そのまま青ざめ気絶して
誰かの足元に気絶して
あっというまに死んでいくのを
見なかったか
銃剣で猛猛しく嘲かし
田畑に育まれるおれたちの意志を
軍靴でギュッギュッと踏みにじり
踏みたおし祖先をあざけている
今は冬なのか
真夜中なのか
田畑が凍てつく冬のいっときを
ね、きみ　おれたちはどこにすわって
腹をすかした子供らをあやすというのか
三千里は変りなく誉しよいか
三千里は依然と錦のように美しいか
嘘っぱちだ　嘘っぱちだ
日ごとおれたちは知らんふりして
おとなしく嘘っぱちに耳を傾け
骨が砕けるほどの鞭に耐えていく奴隷だ
作男だ家山子だ
恥しいよ　恥しいよ　恥しいよ
恥しいよ　寝入った子供の枕元で
おれたちは恥しいばかり
決してひとことも言わしてもらえないんだなあ
譲ってやれるのは恥しさ
寝入った子供の枕元でおれたちは
また　どんな言い訳をすればいいのか
お互いが鋭く睨みつけるだけ
ひとことも情厚い言葉を交さず
研ぎすまされた刃を隠しもって
凍てついた土地を注意深げに素通りしていくのだなあ
どこかで立ち上がれ、とほり叫んでも
空腹であるためふらつき目まいするのだが
とどまるところとてないおれたちは
またどこへ行けばいいというのか
酷いことにもおれたちにくつわをかまして
踏みにじり追いまわす者は
誰か　ね、きみ
それは　誰か
背中に焼き付られたおれたちの疵口
鞭打たれたおれたちの悲しい疵口を
風よ　冬の残酷な風よ
おまえのほろにがい刀先でしても
消すことはできない
ね、きみ
帰るべきものは
帰らなければならないよ
壁に貼ってある冗談も
阿呆みたいなラジオも新聞や雑誌も
黄昏ともなれば空っぽに調子を合わせるTVも
いま頃は正直になって
韓半島の机の隅に置かれなければならないよ
車佐者は消えて行き
汚ないものも消えて行き
広場にも路地にも山や野にも
愛するものが満ちあふれるほどに立ち
心だけで心だけで言葉を交し
ね、きみ
きな臭い冬の野原に
一本の雑草でさえも芽を出さなければならないだろう
この時にはみんなが涙を拭い
漢江にも飛等山にも話すことを許し
野鳥にも一度ぐらい喋ることを許し
ね、きみ
おれたちがもし怠慢ゆえに
おれたちの烙印を消すことができないなら
むしろ並んで的となり
猛猛しい奴の銃に倒れ
倒れながら叫ばなければならないだろう
愛する母国の言葉ではばりさけび
つつじ　つつじ　つつじを
凍てついた土地にも生き生きと
咲かせなければならない
畦道にも咲かせなければならない
ね、きみ　おれたちの悲しい冬を
何度も何度も呼び起こし
縛られた手足で春を待ちながら
必死に全身を蹴かなければならないのじゃないか
ね、きみ
（一九七五年二月十二日の国民投票日、韓国の光州市YWCA断食救国祈祷で朗読された。）

〈投稿歓迎〉

このページは各地の運動の闘争報告、論争、本紙への批判を含む雑感など、読者のページとしてお使い下さい。投稿を大歓迎します。匿名希望の方は、その旨はっきり明記するか、あらかじめペンネームでお寄せ下さい。特別の場合を除いて原稿は極力短く（五〇〇字前後）お願いします。できるだけ全文を掲載しますが、紙面の都合上、カットせざるを得ない場合があります。あらかじめご了解下さい。

〈「闘いの中から」係〉

警察に突き出された事があったからだ。その時のくやしかった事、情なかった事は今に至るも忘れる事が出来ない。戦前、戦時中国鉄労働者（圧倒的に農村出身が多かった）は、文字通り名実ともに、日本軍国主義の侵略戦争協力者のナンバーワンであった。無理もなかったとはいえ、

年末五百万円カンパの中間報告

▽五百円　静岡・加津田　▽五百六十円　大阪・中井　▽千円　青森・津山、千葉・戸田、東京・久仁、阿和島、伊東、神奈川・羽田、愛知・古川、大阪・内山、松村、横田、杉浦、竹田、横川、吉村、西山、藤、京都・大田、吉田、南、久田、中畑、兵庫・安川、山木、大山、佐田、小津、和歌山・川島、山口・松村、福岡・浦田　▽千二百円　大阪・井田　▽千五百円　東京・安田、岡山・藤川　▽二千円　岩手・望月、東京・兼田、庄田、片山、神奈川・原、土田、愛知・津田、藤村、宮本、木原、岐阜・牧田、大阪・古井、丹野、木村、花山、大屋、北、林田、兵庫・中山、野地　▽二千五百円　大阪・佐渡、大鳴　▽三千円　東京・田村、愛知・浦和、大阪・嶋田、松山、松川、村木、高島、木村、中田、森、高林、根津、北山、京都・和泉、八幡、永田、塚本、北川、兵庫・舟木、喜田、立川、奈良・服部　▽四千五百円　大阪・仲村　▽五千円　東京・栗原、高田、松田、長野・無名、愛知・原田、大阪・小西、野間、岡村、保利、山村、戸田、藤木、元田、兵庫・富田、上原、神崎、川原、京都・田沼、岡山・内田、福岡・山本　▽八千円　大阪・小山　▽一万円　東京・本下、大阪・三嶋、清水、堀辺、岩田、尾田、吉田、兵庫・浜田、井田、京都・佐田　▽一万二千円　京都・浅川　▽一万五千円　東京・北村、三重・嶋田　▽二万円　大阪・大塙、中田、京都・渡部　▽二万八千円　京都・野口　▽三万円　大阪・石村　▽五万円　大阪・蟹峨　▽六万円　大阪・田口　▽十円万　大阪・河野　▽八十万円　福岡・小沢　（小計百五十二万七千七百六十円）合計百九十四万一千七百六十円

▽定期カンパ　二万一千円（合計十九万三千円）

▽講読料　三十万四百八十八円（合計三十七万一千六百八十八円）

▼総合計二百五十万六千四百四十八円（十一月二十四日現在）

深刻な不況下での力強いご支援、ご協力、本当にありがとうございました。厚くお礼申上げます。郵便振替が大変おくれておりますので、未到着の方も多いと思います。ご諒承下さい。目標達成のため、一層のご協力をお願い致します。

新左翼社事務局

釜ケ崎越冬実へカンパを

第六回釜ケ崎越冬闘争実行委員会資材班はテント村設営、炊出し準備のため次の物品カンパを訴えます。

テント村関係
畳表・古だたみ、さん木・コンパネ又はパネル、丸太・バタ角、古ロープ・シート、古帆布・古毛布、古着、たき火用廃材・古新聞・古雑誌、ツルハシ・スコップ・のこぎり

炊出し関係
ナベ・カマ、鍋・丁、砥石、まな板、水道用ビニールホース又はパイプ、水道用蛇口

食料品
米、みそ、しょうゆ

その他
タオル、ドンブリ、ハシ、タライ、ポリ容器

連絡先＝大阪市西成区萩ノ茶屋三―六―十五大満荘内釜ケ崎生活協同組合気付　電話六三一―四二一七

11月分収支報告

収入		支出		備考
購読料	98,753	印刷費	270,120	
カンパ（定）	273,500	発送通信費	57,904	
カンパ	71,190	人件費	170,000	10月分
雑収入	148,219	家賃	72,000	12月分
広告代		電話料	21,189	9月分
		活動費		
		交通費	45,615	
		事務用品費	9,450	
		光熱費	10,860	11月分
		支・分局補助	50,000	11月分
		資料費	11,070	
		雑費	9,840	
小計	591,662	小計	728,048	
立替金戻り		立替金	12,750	
借入金	230,000	借入金返済		
前月繰越金	26,307	今月繰越金	107,171	
合計	847,969	合計	847,969	

11月30日現在　借入金総額　2,934,062
10月31日現在　未払金総額　5,231,631

集会案内

四方君の判決延期
3月17日（火）午前10時
名古屋地方裁判所
12月24日に予定されていたが裁判所からの通知で、理由は不明。裁判記録第2集は2月中旬発行の予定。
名古屋市熱田区三町本松一―四松田ビル一〇一号　三菱重工四方君を守る会　電話〇五二（八八一）三二七九

広島手づくり会館年末年始スケジュール
12月28日（日）もちつき大会
12月30日（火）すすはらい・忘年会（会費八百円）
1月6日（火）仕事始め・新年会
新年よりライス（現50円）を百円に値上げします。新メニューにライ麦パン、焼きメシが登場します。
広島市さかい町2―4―1
電話〇八二三―九三―二四一九

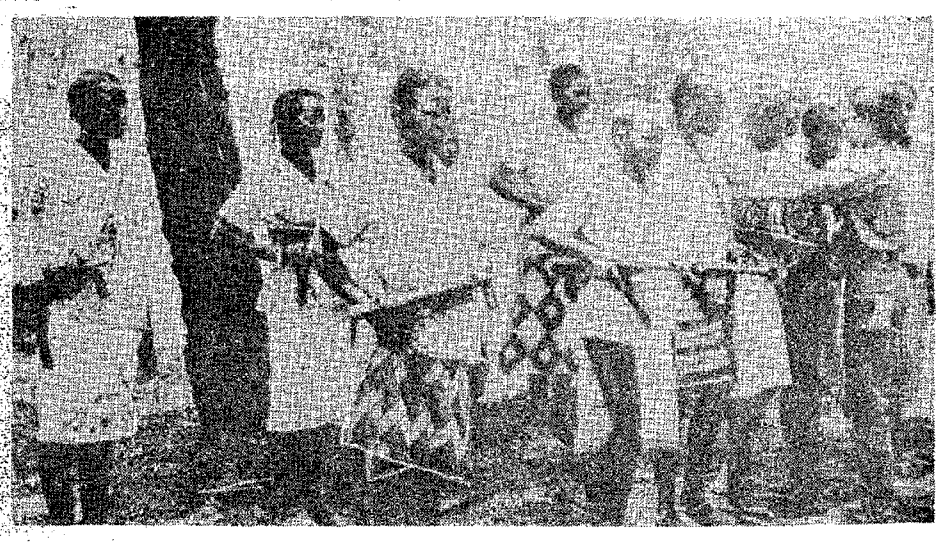
訂正
二三九号二面「病弱者追放阻止を！」の記事のなかで、松本は杉本の誤りにつき訂正します。
編集部

闘わねば殺される

数世紀に及ぶ闘いの歴史

アンゴラ（1）

アンゴラをめぐる情勢は極めて緊迫化しつつある。十九日の米上院は米国のアンゴラ介入に歯どめをかける予算案を可決した。土曜日フォード大統領は鋭い調子でソ連のアンゴラ介入を非難し、上院の決定に不満の声明を発表している。一方、米国と肩を並べFNLA（アンゴラ民族解放戦線）を支援した中国外交は、国際的に非難を浴び、不介入を表明せざるを得なくなった。しかし、アンゴラ民族解放闘争を入り乱れる大国間の外交レベルからのみとらえてすませるのはまちがいであろう。MPLA・FNLA・UNITA（アンゴラ全国独立民族同盟）に分裂している解放戦線の側からその「解放」の内身を問題にして行く必要がある。今回からアンゴラの民族解放闘争の歴史を三回にわけて連載する。



訓練を受けるMPLAの女性部隊

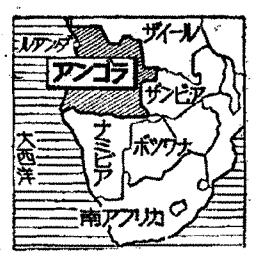
アンゴラの解放運動は、いくつかの異なる運動の中で発展してきた。どの運動が革命的民族主義を象徴しているかを判断する基準は、基本的にいって運動の理論的路線である。これに関する重要な問題は、たとえば運動が民族的に方向づけられているのか、ひとつあるいはいくつかの人種グループに主として向けられているのかどうかということである。運動が国を解放しようと望むあらゆる人々、つまり黒人、混血そして白人の全員を含んでいるのか、あるいは人種主義者の運動であるのか？運動が革命的であるのか、あるいは改革を通して起きる変化を期待しているのか？さらに、運動が植民地主義だけに反対しているのか、あるいは新植民地主義にも反対しているのかどうかということである。

初期の抵抗

アンゴラでの植民地主義に対するアフリカ人の抵抗は、植民地主義そのものと同じだけ古い歴史をもつ。数世紀のあいだ、さまざまなグループが植民地主義に対して戦ってきた。

植民地主義者が彼らの行政的支配権を国土の東部にまで拡大したのは、二〇世紀初頭のことであった。

ほぼ同じころ、さまざまな抵抗が都市において成長しはじめた。大部分は文化的形態をとったが、民族主義者と改革主義者の思想を代表していた。これらの思想は、フランスやイギリスの植民地で発展した抵抗思想ときわめて類似したものであった。地主、階級、軍人、教会がサラザールとファシズムの援助をうけてポルトガルに結びつくようにならなかったら、この改革主義的抵抗運動は旧英仏植民地でのと同じ種類の支配的アフリカ人エリートの運動に発展したかもしれない。しかし、サラザール体制のあいだにそのような改革主義が発展する場はまったくなかった。



プチブルと労働者

アンゴラの植民地化は、伝統的アフリカ人農業社会の崩壊をもたらした。農民は、一九七〇年代に拡大しはじめたスラム地区のある都市へ移動をはじめた。同じころ、アンゴラのポルトガル人移民が大きく増加した。

その結果、教育をうけた約五万のアフリカ人は仕事をみつけるのがしだいに困難となった。彼らの不満は大きくなり、しだいに意見を異にする議論に耳をかたむけるようになった。

新しい政治的指導者が一九四〇年代のおわりに登場したのは、この知的プチブルからであった。（アンゴラのアゴスチノ・ネト、ギニアニビサウのアミルカール・カブラルなど）

これらの政治的指導者と団体は、抵抗のための戦略をつくりあげた。多くの知的アフリカ人がそれに従ったが、彼らはこのプチブル階級に接近することだけで満足しなかった。

彼らは都市のスラム住民との接触、アンゴラの奥地にある村や町の人々との接触も行なった。首都ルアンダのスラム地区で、活動家グループは住民に読み書きを秘密で教えた。

新しい政治的グループと指導者たちは、植民者が彼らの植民地で行なわねばならない〝文明化の仕事〟をもっているという古い思想を拒絶し、そのかわりにアフリカの文明化をヨーロッパに対照して位置づけた。初期の抵抗運動は、アフリカ人を解放してきた。

新しいグループは完全に新しいアンゴラをつくりあげようとした。そして彼らは、このことは教育をうけたアンゴラ人と村の人々とのあいだにあるギャップがうめられ、アンゴラ人の団結をうみだす協力ができたときにのみ起こりうると考えた。

植民地主義者の攻撃

武装闘争は、三つのポルトガル領植民地でそれぞれ違った時期に開始された。しかし、それは三つの場合とも同様の状況下で起きた。つまり、植民地主義者の抑圧と差別が増大し、人民の不安がおさえきれなくなったからである。三つの場合とも、植民地主義者の残虐な暴力をはっきりと示す事件があった。

アンゴラでは、一九六〇年にアゴスチノ・ネトの投獄に反対する平和的デモで三〇人が殺され二〇〇人以上が負傷させられた。

このような抑圧的暴力は、アフリカ人側からの行動を引きおこした。一九六一年二月四日、MPLA（アンゴラ解放人民運動）活動家は政治犯を解放するためにルアンダの刑務所を攻撃した。

不十分な武装の彼らは撃退された。（彼らの中の数人は、武装闘争を続けていたルアンダ北方のデンボ地区にかろうじて逃げた。）

次の週、首都での抑圧が爆発した。一般のアフリカ人が通りで射殺され、アフリカ人地区が爆撃され、数千の人々が惨殺されたのである。

ルアンダの反乱は、十分に計画されていなかった。たぶんそれは、植民地主義者の抑圧に耐えられなくなった民族主義者の苦しみによってかき立てられたのであろう。しかしながら、それは革命的民族主義の発展にとって大きな意味をもった。というのは、民族主義者は、植民地主義者の抑圧に対して武装しなければ確実に殺されるということが、はっきりと証明されたからである。

（ヒーレビ・ニルソン著「闘いの指導者を決めるのは実践」訳出コムラドアフリカ委員会）

（つづく）

月刊労働者総合誌
新地平
1月特大号
定価500円
特集●反合理化闘争深化にむけて
構造的不況と雇用合理化　藤本洋行／川原耕平他
資本主義の危機と労働運動の諸問題　高田昭
コンピュータ合理化と「非人間的」労働　玉川洋次
下請労働者を虐殺しにするな！　全造船浦賀
工場閉鎖は断じて許さない！　愛国メッキ分会
三越家具・反合闘争の経過と総括　大阪労金労組他
「独算制」打破の闘いを全国へ！　大村水道労組
女子労働者の〝使い捨て〟を許すな！　柴崎裕代
全造船石川島分会への地裁不当判決から　秋口隆
〈インタビュー〉私の闘い
厚生省「心身障害」児・者実態調査阻止闘争　藤川章二
わが愛と性の履歴書　初恋　鳥居明男
新連載　丸山友岐子
戦後の労働戦線統一の流れ　山本正之
反弾圧・救援戦線レポート　友田隆一
新地平社
東京都新宿区百人町2-25-16-202
TEL03（362）5803
定期購読　半年　三〇〇〇円
一年　六〇〇〇円（送料共）
郵便振替口座　東京一七二〇六八

青年労働者訪中記

〈5〉

ごつい手の幹部

理論と実践を体で修得

教育のことを書いてきて、どうしてもふれなければならないのが「幹部学校」である。僕らが訪れたのは北京市宣武区五・七幹部学校である。北京の市街を出て田畑の中をかなり走り、それから学校経営の植樹用の畑の中を十分ほど走り、学校に着く。

幹部学校というのは、幹部の教育・養成を行なうところである。幹部というのは前にも書いたように、直接生産労働にたずさわらない人、日本でいったら、役人、サービス業の一部のようなものである。

幹部学校での生活は共同生活である。日課を紹介すると、朝六時起床、六時半～七時体操、～七時半朝食、～十二時半学習・労働、～二時半昼食・昼寝、～六時半学習・労働、～七時半夕食、～十時文芸活動・交流、十時消灯（季節によって少し違う）。この生活は六カ月間である。基本的には晴耕雨読、すなわち天気がよければ外に出て働き、雨が降れば学習する。この六年間で、千二百平米の家を造り、十一万株の植樹、百ムーの果樹園（一ムーは六・七アール）、二百六十ムーの穀類、十六ムーの野菜畑を造り、豚・鶏、小組（十人ぐらいのグループ）と話し合いの場も持つに至った。現在第一期生が学習している。ここでの学生というのは二十才前後の若い人から、五十数才の年寄りまで男女多彩である。五十過ぎた人間が、二十才ぐらいの若い人々と共に働き、共に学ぶなんてことを日本に居て想像できるだろうか。心が若くなかったら、とてもできないことだと僕は思う。小生をしたという感じである。これが幹部なのである。土を知り、陽の下で汗を流して働くというそれだけのことを日本で言ったら、「なんやねん」という言葉を中国の人から耳にするかもしれない）

ここでの基本的なスローガンは、「勤労人民の立場に立つ、そのことを日々の努力の中でしていかなくてはならないのではないか。二十五時間目は質の問題だと思うが、なかなかしんどい。

肌で資本主義を感じとろう。僕らの中にある資本主義をあらいざらいぶちまけて、資本主義対資本主義のけんかをやって、共倒れしよう。それは対極を生みだすだろうと僕は思う。多くの先輩に学ぶのはそこからだ。そういうるつぼをたとえば活動者学校がやったら、肌身の問題となるのではないか。背負わされたことの大きさを、考えながら、前に向かわねばならない。

（おわり）

（北合同ニュース11号より転載）

人民公社で播種機の説明を聞く（上海）